

第29回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成15年9月5日(金) 15時～
- 2 場所 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容
 - (1) 研究発表(15:00～15:40)
 - ・山住勝広 文学部助教授
発表テーマ「ニュースクールをつくりだす」資料1
 - ・石川正司 工学部助教授
発表テーマ「将来型電気エネルギー社会を支える『キャパシタ型蓄電デバイス』の材料開発」資料2
 - (2) 質疑応答(15:40～16:00)
 - (3) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)
 - ア 法科大学院について 資料3
 - イ 東京センターの開設について 資料4
 - ウ 高大連携の推進について 資料5
 - エ 大阪市教育委員会との連携協力に関する協定締結について 資料6
 - オ インターファカルティ教育
「キャリア教育コース」(仮称)の開設について 資料7
 - カ 関西大学・情報教育シンポジウムの開催について 資料8
 - キ インテリジェントアレー専門セミナーへの講座提供について 資料9
 - ク 総合情報学部創設10周年記念シンポジウムの開催について 資料10
 - ケ 第14回「考古学入門講座」の開催について 資料11
 - コ 第32回吹田市民講座(後期)の開催について 資料12
 - サ 平成15年度後期「おおさか文化セミナー」の開催について 資料13
 - シ サタデーカレッジの開催について 資料14
 - ス 学長選挙の実施について 資料15

4 大学側出席者

永田眞三郎学長、藤田武良副学長、大和正史学長補佐

山住勝広文学部助教授、石川正司工学部助教授、中尾正司企画室長、藤本清高広報課長

5 参考資料

- (1) 先端機構ニュース Vol. 29 No. 2
- (2) 関西大学FDフォーラム Vol. 5
- (3) 大学の授業研究ビデオシリーズ第6巻—学生参画型授業「中南米経済論」—
- (4) 山川雄巳編注『児島惟謙 大津事件手記』(関西大学出版部発行)

以上

ニュースクールをつくりだす

文学部助教授 山住 勝 広

文学部教育学専修の私の研究室では、特定非営利活動法人（NPO）ニュースクール・センターを設置し、「ニュースクール」、すなわち「新しい学校」をつくりだす実践に取り組んでいる。それは「実験小学校」の設立をめざす試みである。具体的には、正規の学校外の時間といえる土曜日のサタデースクールや、夏休みのサマーキャンプなどを行い、地域の小学生と専修の学生たちが活動拠点である文学部教育学専修教育調査室に集まり、子どもたちにとって新しいタイプの学習活動を経験していく場を切り拓こうとしている。

現在、毎週土曜日に近隣の小学生8名（2年1名、3年2名、4年2名、5年3名）が継続的にニュースクールに通っている。すべて大学周辺に在住の子どもたちである。このサタデースクール実施の社会背景には、「ゆとりの教育」と呼ばれる教育改革の動きがある。「学校完全週5日制」や「基礎学力低下問題」である。私たちは、大学における教育実践の研究、すなわち子どもたちの成長の環境としての新しい学習活動のデザインを、地域の子どもや親の具体的で現実的な教育問題と結びつけたいと考えた。そして、新しいコンピュータ・テクノロジーを学びの活動に導入し、子どもたちの創造性と想像力を育てていけるような、仲間との協働の学習経験をデザインする、という教育課題に取り組んでいこうと考えた。

このような課題は、私たちの文学部教育学専修における教育と研究の革新とも大いに関連する。ニュースクールの活動を通じて強く感じることは、学生たちが子どもたちに及ぼす独自の影響力である。そこでは大学で教育学を学ぶ学生たちと地域の子どもたちとの新しい結びつきやつながりが紡ぎだされている。当日の研究発表の中で、このようなニュースクールをつくりだしていく試みを報告し、私たちの社会と時代の「明日の学校」を展望してみたい。



やますみ かつひろ
山住 勝広
助教授

1963年神戸市生まれ。神戸大学大学院教育学研究科学校教育専攻修士課程、同文化学研究科社会文化専攻博士課程を修了後、92年4月から大阪教育大学に専任講師として着任され、97年4月から助教授に就かれた。96年には、「社会文化的活動理論による教科教授過程の構成に関する研究」により学位・学術博士（神戸大学）を取得されている。2002年4月より本学文学部教育学科のスタッフに迎えられた。今日、教授論、学習論への関心が広まっているが、この分野での数々の研究を蓄積されており、新進気鋭の研究者である。学校におけるカリキュラム開発の共同作業に参加しながら、自律と創造を支援する子どもの新しい学習活動づくりに取り組み、ニュースクール運動にも参加する実践家である。著書に、『学びのポリフォニー』、『教科学習の社会文化的構成』、『Learning in Classrooms : A Cultural-Historical Approach』ほか。学科に新しい風を吹き込むものと期待されている。

将来型電気エネルギー社会を支える 「キャパシタ型蓄電デバイス」の材料開発

工学部助教授 石川 正 司

フューエルセルなどの未来型発電システムでは、発生させた電気をプールし必要に応じて放出する「蓄電デバイス」がシステム中に必要である。一般の蓄電池では電力消費の変動に追随しづらいことから、急速充放電が可能なキャパシタによって蓄電する技術が注目されている。しかし、キャパシタ最大の問題は蓄電容量が低いことであり、発電システムと効率よく組み合わせられない。私はこの課題を克服すべく、キャパシタ本来の急速充放電特性を維持したまま電池並みの高電気容量を発現する材料を研究している。すなわち、炭素電極と電解質材料にナノレベルの構造最適化を行った高エネルギー材料開発を進めている。このようなキャパシタは、省エネシステムの要である「エネルギー負荷平準化」と「エネルギー回生」に適する。さらに、非常に広範な分野、例えば電気自動車、大規模工場のバックアップ電源などにも適用でき、将来型電気エネルギー利用の鍵といえる。



いしかわ まさし
石川 正司
助教授

西宮市生まれで奈良育ち。大阪大学工学部応用化学科から同大学院博士前期課程を1987年修了後、企業の研究所に2年勤務。その後、大阪府立女子大学助手として勤務しつつ91年大阪大学より博士号を受けられた。同年秋に山口大学応用化学工学科助手、97年助教授、2000年度はミネソタ大学に在外研究員として滞在。03年春に本学助教授として着任。専門は工業物理化学と電気化学。生体関連電子移動反応から研究をスタートされ、現在は電池やキャパシタなどのエネルギー貯蔵デバイスにまで研究を展開、電気化学会から佐野賞・進歩賞を受けられた。学生と本音でざっくばらんに接し、先端的な研究であっても学生自身が研究で個性を発揮できるように育てるのがモットー。趣味は浅く広く移り気。学生時代からベース、金管、ドラムなど様々な楽器を触られたが最近では時間と環境がないとのこと。スポーツではスキーを好まれるが、最近ではマウンテンバイクにも凝っておられる。